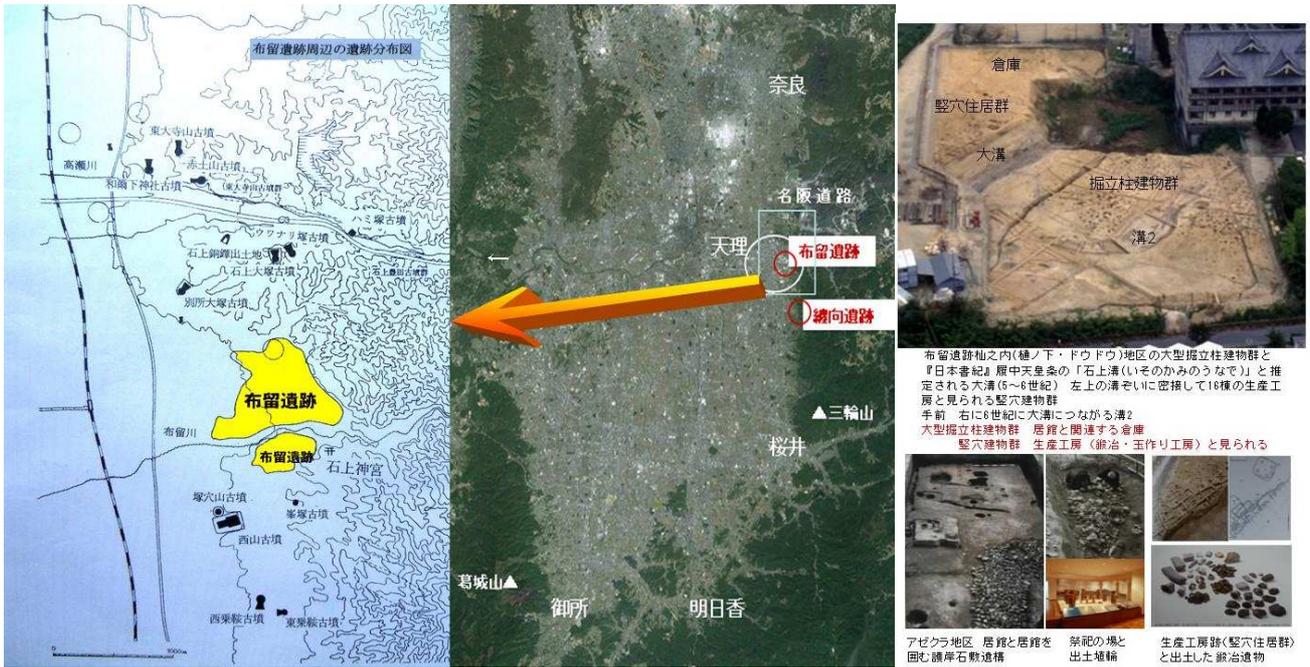


1. 初期大和王権を支えた物部氏の本拠地「布留遺跡」概要 検出された遺構と出土遺物から見えてくる遺跡の姿を知る

天理参考館 「大布留遺跡展 -物部氏の拠点集落を掘る-」図録の再整理



布留遺跡内(穂ノ下・ドウドウ)地区の大型織立建物群と『日本書紀』履中天皇条の「石上溝(いそのかみのうなで)」と推定される大溝(5~6世紀) 左上の溝せいに密着して18棟の生産工房と見られる竪穴建物群
 手前、右に6世紀に大溝につながる溝?
 大型織立建物群 居館と関連する倉庫
 竪穴建物群 生産工房(鍛冶・玉作り工房)と見られる

アゼクラ地区 居館と居館を囲む礎石敷遺構
 祭祀の場と出土土器
 生産工房跡(竪穴住居群)と出土した鍛冶遺物

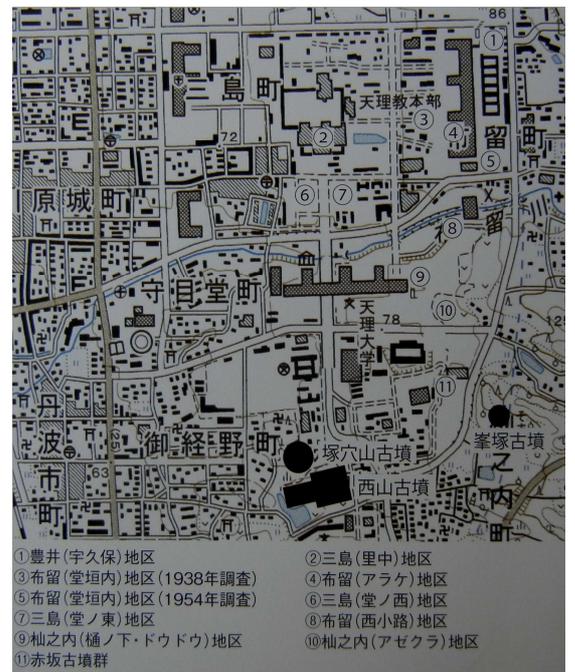
奈良盆地東縁部に位置する旧石器時代から現在まで続く複合遺跡布留遺跡のある「天理市布留」は南北に長く伸びる奈良盆地の東縁中央部山麓から流れ出る布留川の扇状地にある遺跡で 奈良から飛鳥へ南北に結ぶ山辺の道の間地点にあり、また、東西には現在も名阪国道が山を越えて行く、東国(伊勢-東海)・西国(河内・瀬戸内)と大和を結ぶ交通の結節点として重要な地点にあたる。 また、この布留の地は 初期ヤマト王権の王城の地に隣接する北の守りの位置に当たる。

布留遺跡は石上神宮の山裾から西へ布留川が流れ下る傾斜地「布留」の地にあり、この布留川をはさんで 北側に神殿ほか天理教本部の諸施設 南側に天理大学がある広大な地域が布留遺跡で、古墳時代 大和王権を支えた物部氏の集落の数々の重要な遺構や遺物等がこの地域の下にそっくりそのまま埋まっている。

本や資料で何度もそれらを眼にする機会がありましたが、それが地図上のどの位置に当たり、また 遺跡全体として遺構・遺物を眺めたことはなし。 また 一番の興味である鍛冶遺構や遺物について、眼に触れた程度で、中身を検討したことはなし。

今回大布留伝へ行って、初めて それらを確認することができました。今回大布留展で知ったことも含め、「布留遺跡の顔」をまとめると次のとおりである。

- ◎ 古墳時代前期を代表する土器の形式「布留式土器」は 1938 年はじめて布留遺跡調査がおこなわれた時に出土した土器につけられた名称で、弥生時代から古墳時代への移行期計測の基準土器として編年の重要な土器である。
- ◎ また 布留遺跡は初期大和王権の軍事を担った物部氏が本拠を置いた集落遺跡で、古墳時代中期の5世紀には、布留川南岸地域に豪族の居館や大型倉庫が建てられ、また、日本書紀に記されている「石上溝」と推定される大溝が出土している。
- ◎ この布留遺跡の東側には物部氏が古くから祭祀をつかさどってきた石上神宮が鎮座し、大量の武器が納められ、大和王権の武器庫としての役割を担ってきた。



① 豊井(宇久保)地区
 ② 三島(里中)地区
 ③ 布留(堂垣内)地区(1938年調査)
 ④ 布留(アラケ)地区
 ⑤ 布留(堂垣内)地区(1954年調査)
 ⑥ 三島(堂ノ西)地区
 ⑦ 三島(堂ノ東)地区
 ⑧ 布留(西小路)地区
 ⑨ 穂之内(穂ノ下・ドウドウ)地区
 ⑩ 穂之内(アゼクラ)地区
 ⑪ 赤坂古墳群

布留遺跡 発掘調査区域

- ◎ 布留遺跡の布留(堂垣内)地区では石敷に多数の土器や滑石製模造品を伴った祭祀の場や祭場を画するために使用されたと見られる特異な円筒埴輪群が発見されている。また、祭りにかかわる多量の高杯群が投棄された場所も 1955 年に調査されている。

- ◎ さらに 玉工房や武器工房との関連を示す遺物や渡来人とのかわりを示す遺物も多数出土している。

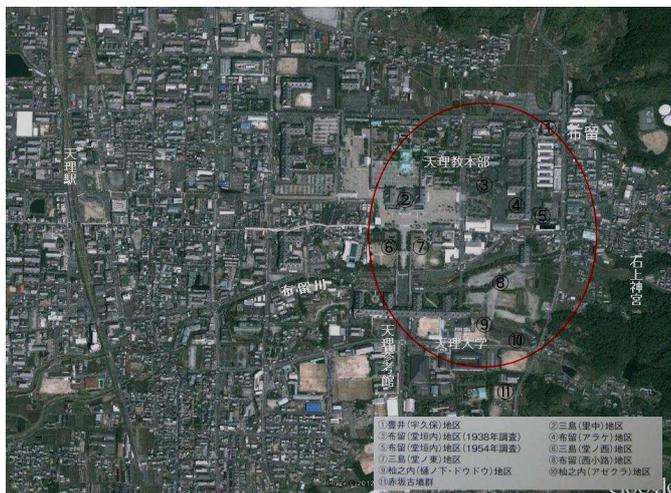
大布留遺跡展「物部氏の拠点集落を掘る-」ではこの布留遺跡より出土した数々の資料から物部氏の実態に迫る。

天理参考館 ニュースレター N0.12 より引用整理

物部氏の根拠地 布留遺跡から検出した主要遺構・遺物

「大布留遺跡展」図録より整理

① 豊井(宇久保地区) 1984年調査	埴輪群が発見された布留(アケラ)地点から北東300m 古墳時代の掘立柱建物・井戸・土器溜まり遺構と中世の漆土 土師器高杯(60以上)・壺・甕・須恵器甕・滑石製模造品(勾玉・管玉・剣型石製品・有孔円板・白玉)・鉄鎌などミニチュア農具
② 三島(里中地区)	布留川分流の流路が変わる氾濫原で古墳時代の井戸以外に遺構検出されず 古墳時代の流路から土師器・須恵器・木器などが大量に出土。 特に5~6世紀の木製刀剣装具類(把装具・鞘)が出土 流路からは大量の鉄滓・砥石が出土 付近に大掛かりな武器工房があったと見られる
③ 布留(堂垣内地区)【1】 1938年調査	A・B・C3地点から祭祀にかかわると考えられる石敷遺構(住居跡を囲むと推定)検出。 この敷石に集中して土器類(土師器甕・壺高杯・小型丸底壺)出土 A地点の敷石遺構から滑石製模造品の玉類・埴輪出土
④ 布留(アラケ地区) 1995年調査	1938年調査された地区から東に約60mの地点 北西から南東に幅0.4~0.7mの石列が約7m以上のび、埴輪がその北側から、破片となって出土。(復元作業で円筒埴輪10朝顔形埴輪15~16個 巴形や半円形四角形、三角形などの透孔がある特異な計尺。祭祀の場で使われたものが破棄されたと推定されている)
⑤ 布留(堂垣内地区)【2】 1954年調査	1938年調査地点より東南150m 5世紀の石敷遺構を検出 土器片に混じって剣型石製品・有孔円板・勾玉・管玉・白玉・など数千点に及ぶ滑石製模造品・ガラス製小玉・碧玉製管玉が出土
⑥ 三島(堂の西地区)	5~6世紀 玉未成品・石核・剥片が出土
⑦ 三島(堂の東地区)	
⑧ 布留(西小路地区) 1976~1977年調査	布留川南岸に位置する地区で5世紀を中心とする柱穴・土坑・溝を検出 下記に示す出土品が示す通り 祭祀に関係した遺構が集中している場所とみられる 各種の須恵器や土師器のほか、製塩土器、有孔円板、管玉、白玉、ガラス玉が出土 土坑(LN22) 内には倒立した土師器甕が置かれ、横から緑泥製の刺形石製品が出土 土坑(LN99) 内部には灰と炭化物が厚く堆積していたが、底や壁に焼けた跡なく、 ここからは各種須恵器・土師器のほか 製塩土器・緑泥石製の有孔円板・管玉 ・100点を超える白玉・ガラス玉・土玉が出土 土坑(LN100) ここからはU字型鉄製鋏先・土師器杯・高杯・ミニチュア壺などのほか 緑泥石製の有孔円板が出土
⑨ 杣之内 (樋ノ下・ドウドウ地区)	布留川南岸沿いの石神神宮から西400m地点が杣之内(アゼクラ)地区 豪族の居館に関わりと見られる石敷遺構を検出 さらに北西に100mの杣之内(樋ノ下・ドウドウ)地区でも、大型の掘立柱建物跡や大溝が見つかった。この溝は『日本書紀』に記された「石上溝」にあたりと推測されている。 この大溝からは須恵器や土師器など多数の土器とともに、鍛冶関連の遺物や滑石製模造品の祭祀遺物、馬歯、馬骨が出土。 また、大溝に面した北西部と南東部に多くの掘立柱建物跡や竪穴建物群が見つかった。 その建物跡から鉄鉗や鉄滓、ふいご羽口破片らが出土 この付近が玉作り、ガラス・鍛冶工房だったことが分かる。 これら検出された居館にかかわる遺構や大型建物群遺構そして生産工房遺構そして大溝の開削などから、この地域が物部氏の本拠地 布留遺跡の中枢部と見られる
⑩ 杣之内(アゼクラ地区)	
⑪ 赤坂古墳群	布留遺跡の豪族居館や大型倉庫のある丘陵の南150m 谷を隔てた丘陵に5~7世紀にかけての小規模な20基ほどの古墳群で、鍛冶工人が築いた群集墳 赤坂17号・18号の間の周溝から鞆羽口や鉄塊・鉄滓 赤坂2号・4号・6号・9号墳から鉄滓出土また、赤坂14号墳殻出土した韓式甕から 被葬者は百済系渡来人と推察されている。
渡来系遺物の出土	赤坂古墳群のほかにも 布留遺跡からは、5世紀の韓式系土器など 渡来人との関わりを示す遺物が数多く出土し、数多くの渡来系集団が布留遺跡にいたと見られている。



1.1. 布留式土器の出土と祭祀の場

祭祀の役割を重要任務としていた物部氏

布留遺跡最初の学術調査が行われたのは 現在 天理教の大神殿の東側 広場をはさんで 南北に長い建つ天理教本部建物の前のあたりか?? 布留（堂垣内）地区。

天理高等女学校のプール建設に際して 偶然 遺跡の存在が注意され、1938 年に末永雅雄・小林行雄・中村春寿氏等によって発掘調査がおこなわれた。

この調査で A・B・Cの3地点で 石敷遺構が検出され、住居跡であると指摘された。注目すべきはこの石敷遺構の上に木炭片を含んだ黒土層や灰層が認められ、これらの敷石から土師器の甕・壺・高杯・小型丸底壺が大量に出土し、須恵器も少しあった。また、A地点の敷石から滑石製模造品と呼ばれる玉類や櫛出土し、後の調査でこれらの敷石は祭祀にかかわるものとされた。

(大布留展図録より)

出土した土器の一群は、当時知られていた土師器の中でも古い様相を呈していたため、「布留式土器」と命名されたが、今日、近畿地方の古墳時代前期を代表する土器とされ、この時代の古墳や遺跡の築造時期を推定する基準になっている。また、これら布留式土器と呼ばれる土器類は布留遺跡のあちこちの場所から出土している。

また、1954 年にはこの調査地点から南東に 150m はなれた地点で 5世紀の石敷遺構が検出され、多数の土師器の壺や高杯のほか、土器片に混じって剣型石製品・有孔円板・勾玉・管玉・白玉・など数千点に及ぶ滑石製模造品・ガラス製小玉・碧玉製管玉が出土している。



石敷遺構調査風景

上記の堂垣内地区の地点から東に約 60m の地点堂垣内 アラケ地区 現在の天理教本部の大きな建物の南端近傍??

で北西から南東 に幅 04~0.7m の石列が 約 7m 以上のび、埴輪がその北側から、破片となって出土し、祭祀の場で使われたものが破棄されたと推定されている。



祭りの場(天理考古館展示) と アラケ地区から1995年検出された祭りの場の一部

(復元作業で 円筒埴輪 10 朝顔形埴輪 15~16 固体 巴形や半円形四角形、三角形などの透孔がある特異な計状。)



2 布留(堂垣内)地区(1938年調査)出土遺物 5世紀 二重口緑壺の口径16.5cm

1938 年調査で堂垣内地区からの出土遺物



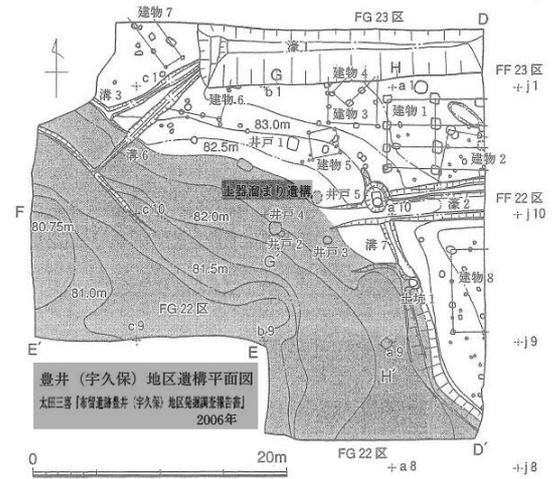
4 布留(堂垣内)地区(1954年調査)石敷遺構出土遺物 5世紀 二重口緑壺の口径9.0cm

1954 年調査 堂垣内地区の石敷遺構調査風景と堂垣内地区からの出土品



布留(堂垣内)地区の祭りの場の一部と出土埴輪
置田雅昭「布留遺跡出土の埴輪」天理参考資料案内シリーズ23 1988年

さらに 埴輪群が発見された布留(アケラ)地点から北東 300m 現在の布留の十字路の南西側の角周辺の豊井(宇久保)地区からは1984年の調査で古墳時代の掘立柱建物・井戸・土器溜まり遺構のほか中世の濠が出土した。この土器溜まりからは 土師器高杯(60 以上)・壺・甕・須恵器甕・滑石製模造品(勾玉・管玉・剣型石製品・有孔円板・白玉)・鉄鎌などミニチュア農工具が出土。この「土器溜まり遺構」は自然河道の北岸にあり、遺物の出土状況から、北の側の高い位置から一括投棄されたものと考えられている。



豊井(宇久保)地区出土遺物

布留川の南岸に沿って建つ天理大学の建物北端のすぐ北東側広場の布留川南岸の地点 布留西小路地区からも5世紀を中心とする柱穴・土坑・溝を検出。そこは祭祀に関係した遺構が集中している場所とみられ、各種の須恵器や土師器のほか、製塩土器、有孔円板、管玉、白玉、ガラス玉が出土した。また、渡来人の祭祀へのかわりを示す 韓式土器やU字の鉄製鎌先出土している

特に 土坑(LN22) 内には倒立した土師器甕が置かれ、横から緑泥製の剣形石製品が出土

土坑(LN99) 内部には灰と炭化物が厚く堆積していたが、底や壁に焼けた跡なく、ここからは各種須恵器・土師器のほか 製塩土器・緑泥石製有孔円板・管玉・100点を超える白玉・ガラス玉・土玉が出土

土坑(LN100) からはU字型鉄製鎌先・土師器杯・高杯・ミニチュア壺などのほか緑泥石製有孔円板が出土

これらのほか 渡来人の祭祀へのかわりを示す 韓式土器やU字の鉄製鎌先出土している



布留西小路地区の土坑から出土した5世紀を中心とした祭祀系遺物

渡来人の関係を示す韓式土器も出土

上記したごとく、物部氏の本拠地 布留遺跡から これら数々の祭祀石敷遺構や大量の遺物が出土しており、石上神宮の祭祀をつかさどっていた物部氏の重要な任務としての祭祀の一端をうかがい知れる。

【参考】 土器編年と布留式土器

異なる場所での事象を统一的に年代を知ることは極めて重要ですが、文字がない時代の年代を知ることはきわめて難しい。

日本では 遺跡から出土した土器の種類を細かく分類し、新旧の順に並べること「土器編年」により、年代を知ることがおこなわれてきました。しかし、土器編年からわかるのは、土器を古い順番に並べることであって、年表にして何年ごろかという具体的な年代ではありません。つまり、相対的な年代であって、絶対年代ではない。

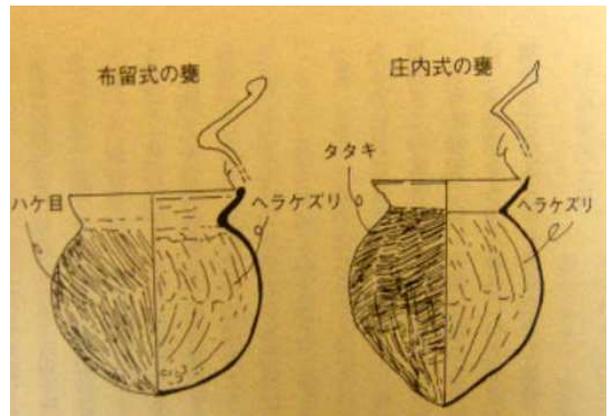
たとえば、土器のタイプから紀元前35年とか、紀元後100年というような具体的な年代は絶対に出てきません。

ある土器が弥生中期後半のものであることはわかっても、いったい何年から何年ごろまで使われたか、ということは厳密にはわかりません。

あえて年代をつけるには、土器と一緒に出土する遺物などによって、おおよその年代を推定するだけです。

たとえば、土器と一緒に作られた時代がはっきりしている中国の鏡や貨幣が出土した場合は、年代を知る有力な手がかりとなる。多くのデータをそろえ、比較検討して初めて、ある程度正確な年代が推定できる。

もっと確実に年代を知る方法として登場したのが、年輪年代法やC12 加速器 分析法などの手法で、現在では これらの長所・欠点を補い合いながら年代が検討されている。



布留式土器と庄内式土器の特徴模式図

【畿内・大和の土器編年 年代対照表の一例】

右図は弥生時代から古墳時代前期の土器編年表の一例を示しています。

弥生時代から古墳時代へ 東アジア情勢の変化と呼応しつつ日本が 倭国・邪馬台国から初期大和王権へと大きく変貌してゆく時代を系統的に捉えるための尺度として 土器編年が果たしてきた役割は大きい。

特に 近畿の庄内式土器・布留式土器の出土は古墳時代の幕開けを告げる土器として極めて重要な土器である。

この土器編年の基準時になってゆく布留式土器が始めて出土したのが、この布留である。この地で最初に作られたわけではありませんが、古庄内式土器とともに墳時代の始まりに使われた土器の名称として、全国で使われています。

これら庄内式土器も布留式土器もいずれも古墳時代に使われた素焼き無紋 85

実年代	時代	時期	期	近畿編年(寺沢)	北九州編年(柳田)	
300 200 100 0 100 200 300 400	弥生時代	(縄文)	前期	I 第I様式	長原式	板付I式
						板付II式
		中期	II 第II様式	0	城ノ越式 1	
				1 2	須久式 2 3 4 5	
			III 第III様式	1 2		
				IV 第IV様式	1 2 3 4	
		後期	V 第V様式		0 1 2 3	高三瀨式 1 2 3
				VI 第VI様式	1 2	下大隈式 4
		古墳時代	前期	VII 庄内式	0 1 2 3	西新式 5
					布留式	I
II	0 1 2 3 4					

0°C前後の酸化炎で焼かれ、赤褐色の土器で、布留式は底が丸く外面にハケ目模様があり、庄内式はややとがっていてタタキ技法というものが使われている。内側はどちらも薄く削ってあり、驚くほど薄いものもある。

庄内式土器が3世紀前半から現れ、布留式土器がその後続いた。

なお、縄文・弥生土器には地域性が強いのに対し、土師器では、同じような意匠・技法による土器が本州から九州までの規模で分布。これは、前代と一線を画すような文化交流の増大を意味し、その裏に政治的統一の進展を見る説が有力である。

1.2. 物部氏の武具 武器製造を推測させる三島里中地区から出土した大量の把装具類

現在 天理教の大神殿が建つ三島(里中)地区は布留川から分流した流路が何時期にも渡って流を変えて堆積した氾濫原。

このため、古墳時代の井戸以外に遺構検出されなかったが、古墳時代前期から後期にいたる多くの流路から 土師器・須恵器・木器などが大量出土し、近辺に活発な生活の場があったと見られている。

特に注目されるのは 5～6 世紀の木製刀剣装具類(把装具・鞘)の出土。総数 61 点にもものぼる全国一の出土量は物部氏が初期ヤマト王権の軍事部門を握り、大きな勢力を誇っていたことを示す例証だろう。

また、これらの木製刀剣装具類の出土には数多くの未成品も混在しており、また流路からは多量の鉄滓や砥石も出土していることから、刀や剣などの武器類をつくる大掛かりな武器工房がこの近辺に討ったことを推測させるものとして重要である。



14 木製漆塗り把縁 5～6世紀 右の把縁の高さ11.6cm



木製把・鞘出土状況



15 三島(里中)地区出土木製把 5～6世紀 中央一本つくりの把の長さ14.2cm

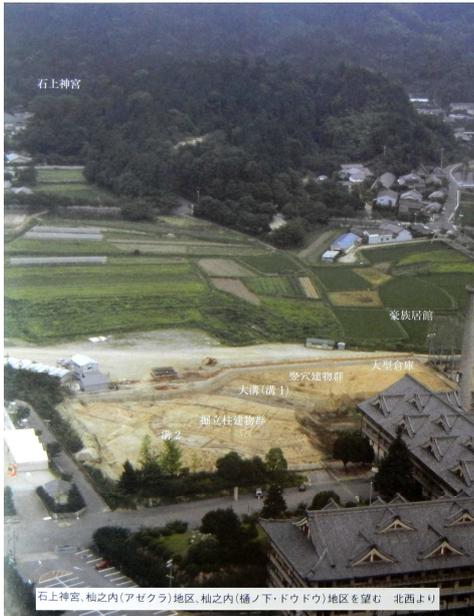


16 三島(里中)地区出土木製鞘・鞘装具 5～6世紀 右端の鞘の長さ40.9cm

布留遺跡 5～6世紀 三島里中地区出土 左 把装具類 右 鞘 装具

1.3. 物部氏の居館と物部氏が営んでいた玉作り・鉄器生産工房

布留遺跡 物部氏の中核 杣之内 (樋ノ下・ドウドウ地区 & アゼクラ地区) そして 三島地区

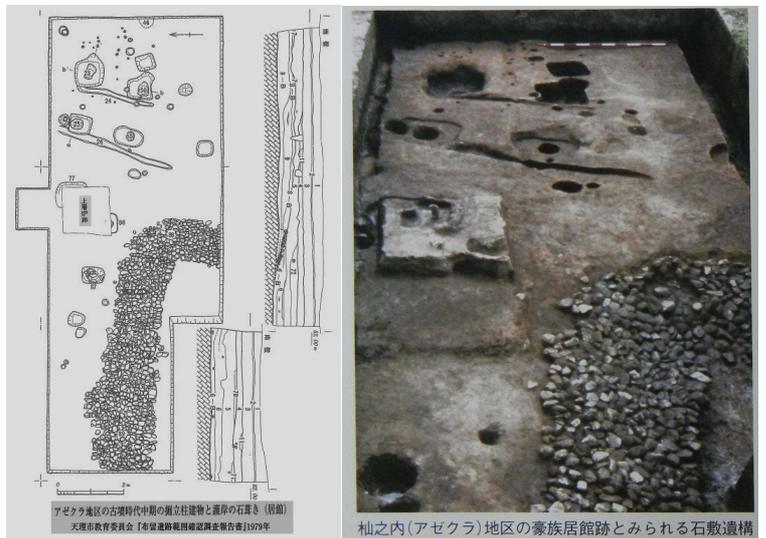


布留川沿いの天理大学の建物の北端から北側には広い駐車場が広がっており、その奥 400m ほどの山裾には 緑に包まれた石上神宮の丘が見えている。この広い駐車場の際 天理大学の建物に接するところが、樋ノ下・ドウドウ地区で さらにこの地区に隣接して南東側 駐車場の南側の畑周辺がアゼクラ地区である。

この杣之内アゼクラ地区からは豪族の居館に関わると見られる石敷遺構を検出。そして、さらに北西に 100m の杣之内 (樋ノ下・ドウドウ) 地区では中央に布留川から引水するための大溝が開削され、この溝の両側に面した北西部と南東部に多くの大型掘立柱建物や生産工房が林立することから、布留遺跡 物部氏の中核だったと考えられている。

杣之内アゼクラ地区から検出された豪族の居館に関わると見られる石敷遺構周辺は 規模は不明であるが、掘立柱建物2棟以上とその建物を守る葺き石の護岸(石敷遺構)である。

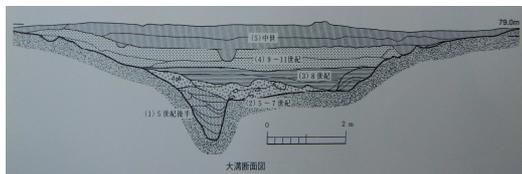
当初は前方後円墳の一部とも考えられたが、現在は居館の建物と周囲を区画・防衛する護岸の一部と考えられており、護岸の直上や掘立柱建物の柱穴から、土師器高杯・甕・壺などが出土し、5世紀の遺構とみられている。



杣之内アゼクラ地区の豪族居館とそれに関わる石敷遺構

また、中央の大溝は幅約15m 深さ約 2m の大規模なもので、布留川から引水するために 5世紀に開削され、『日本書紀』に記された「石上溝」と推定される。この大溝からは須恵器や土師器など多数の土器とともに、鍛冶関連の遺物や滑石製模造品の祭祀遺物、馬歯、馬骨が出土。

また、6世紀に入ると大溝に接続するみぞ2が作られ、この大溝と溝2に挟まれた領域にはこれに並行する方位を持つ建物建てられ、溝2からはさまざまな祭祀関連遺物が出土している。

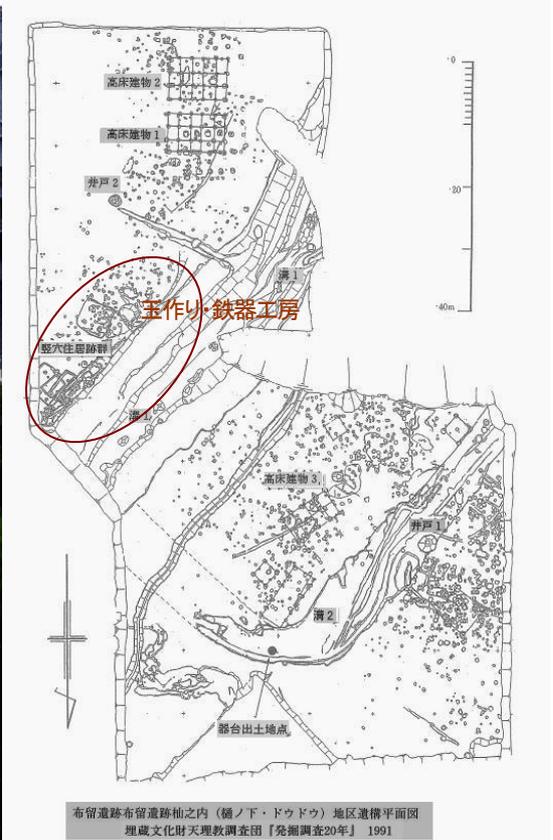


5世紀の「石上溝」と推定される大溝



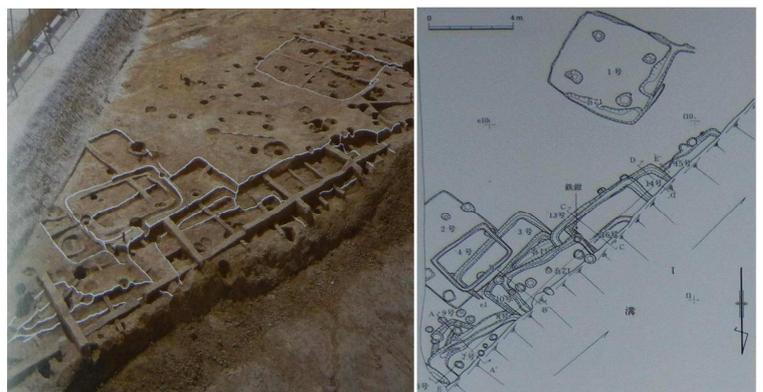
杣之内(樋)ノ下・ドウドウ地区 大溝・溝2 から出土した祭祀関連遺物

下図は杣之内(樋)ノ下・ドウドウ地区で検出された遺構全体図で、下方が北 上方が南で、北東から南東方向へ中央部を大溝が走っている。この大溝の両側に大型の掘立柱建物跡群・竪穴住居群跡ができた。



物部氏の中核 玉作り・鉄器の生産工房群や倉庫群の遺構図

大溝に面した北西部と南東部に多くの掘立柱建物跡や竪穴建物群が見つかったが、その建物跡から鉄鉗や鉄滓、ふいご羽口破片らが出土し、この付近が玉作り、ガラス・鍛冶工房だったことが分かる。特に、この南東部の大溝に近接して16棟もの方形の竪穴住居群がかなり密集して見つかかり、ここからは鍛冶や玉作りなどにかかわる遺物が多数出土し、鍛冶に関する炉跡は見つかっていないが、ここが物部氏の玉作り・鉄器の生産工房と見られる。



1.4. 物部氏の武具 武器製造を推測させる三島里中地区から出土した大量の把装具類

現在 天理教の大神殿が建つ三島(里中)地区は布留川から分流した流路が何時期にも渡って流を変えて堆積した氾濫原。

このため、古墳時代の井戸以外に遺構検出されなかったが、古墳時代前期から後期にいたる多くの流路から 土師器・須恵器・木器などが大量出土し、近辺に活発な生活の場があったと見られている。

特に注目されるのは 5～6 世紀の木製刀剣装具類(把装具・鞘)の出土。総数 61 点にものぼる全国一の出土量は物部氏が初期ヤマト王権の軍事部門を握り、大きな勢力を誇っていたことを示す例証だろう。

また、これらの木製刀剣装具類の出土には数多くの未成品も混在しており、また流路からは多量の鉄滓や砥石も出土していることから、刀や剣などの武器類をつくる大掛かりな武器工房がこの近辺に討ったことを推測させるものとして重要である。



布留遺跡 5～6 世紀 三島里中地区出土 左 把装具類 右 鞘 装具

1.5. 渡来人と工人集団 【1】 韓式系土器などの遺物の出土

布留遺跡からは、5世紀の韓式系土器など渡来人との関わりを示す遺物が数多く出土し、朝鮮半島の各地から数多くの渡来系集団が布留に来ていたと見られている。

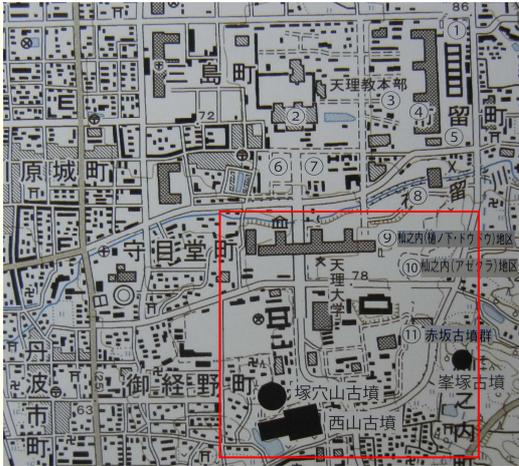
- 三島里中地区の包含層から出土した高杯は 脚部に火焰型の透孔のある珍しいもので伽耶地域のものと見られる
 - 杣之内樋ノ下・ドウドウ地区の土坑から 須恵器の杯・土師器高杯・甕などと共に韓式系軟質土器の格子目タタキメが施された壺・把手付鍋が出土 この鍋の外面には百済との関連が指摘されている長足文と呼ばれるタタキメがある。また 同様の把手付鍋は布留西小路地区の土坑からも出土し、祭祀にかかわるものとみられている。
 - 杣之内樋ノ下・ドウドウ地区の大溝から韓式の壺が出土 この壺にも長足文と呼ばれるタタキメがある
- 多くの韓式土器の出土から、布留の地でも 鍛冶や馬の飼育のほか大溝の掘削などの大土木工事等に伽耶や百済系の渡来人が活躍していたと考えられる。



韓式系土器の地域の特徴が出るタタキ目

1.6. 渡来人と工人集団 【2】 渡来工人の群集墓 赤坂古墳群

布留遺跡 杣之内(樋)ノ下・トウ地区の居館や大型倉庫がある丘陵南側には約150mの谷をへだてて、長さ100m 幅40m程の独立丘陵があり、この丘に5世紀～7世紀にかけて小規模な20基あまりの古墳が密集して築かれている。



この群集墓の古墳のいくつかの周溝から韃羽口や鉄塊・鉄滓が出土し、またいくつかの古墳から鉄滓が出土し、古墳の状況から被葬者の階層が集団の中で、決して高くはないとみられることから、これらの古墳の被葬者が鍛冶工人であると見られている。

また、外面に鳥足文のタタキメのある韓式土器が出土した古墳(赤坂14号墳)もあり、この古墳の造営者が百済系の渡来人とみられる。

布留遺跡周辺では5世紀末頃になると赤坂古墳群のように、集落に近接して小規模な群集墓が築かれ始め、6世紀になると東方の山麓に大規模な群集墓が作られ始める。(約150基の古墳群 石上・豊田古墳群など)

ここでも鍛冶にかかわる遺物が出土しており、鍛冶にかかわる人々がさまざまな人々がさまざまな形で古墳を造営してゆく姿が見える。



33 鉄錐 鉄棒 石上・豊田古墳群ホリノヲ2号墳 6～7世紀
鉄錐の長さ42.8cm

34 韓式系甕 赤坂14号墳 5～6世紀 口径12.8cm

35 赤坂6号墳出土遺物 6～7世紀 須臾器の口径18.3cm

36 赤坂17・18号墳間の周溝出土遺物 6～7世紀 土師器杯の口径11.9cm

本稿「1. 初期大和王権を支えた物部氏の本拠の集落遺跡『布留遺跡』-布留遺跡から検出された遺構と出土遺物から遺跡の性格を知る-」は 天理参考館「大布留展」図録の内容・写真を 布留遺跡発掘調査区の位置を明確に意識するため、google earth 写真を補いつつ、記載されていた発掘調査区・遺構・遺物の内容を そのまま私の理解に沿って 再整理させていただきました。

また、布留遺跡から出土した遺構外略図は 山内紀氏「ヤマトの開発史 古墳時代の布留遺跡」(2008. 7. 31.) から採らせていただきました。

【整理 base 資料】

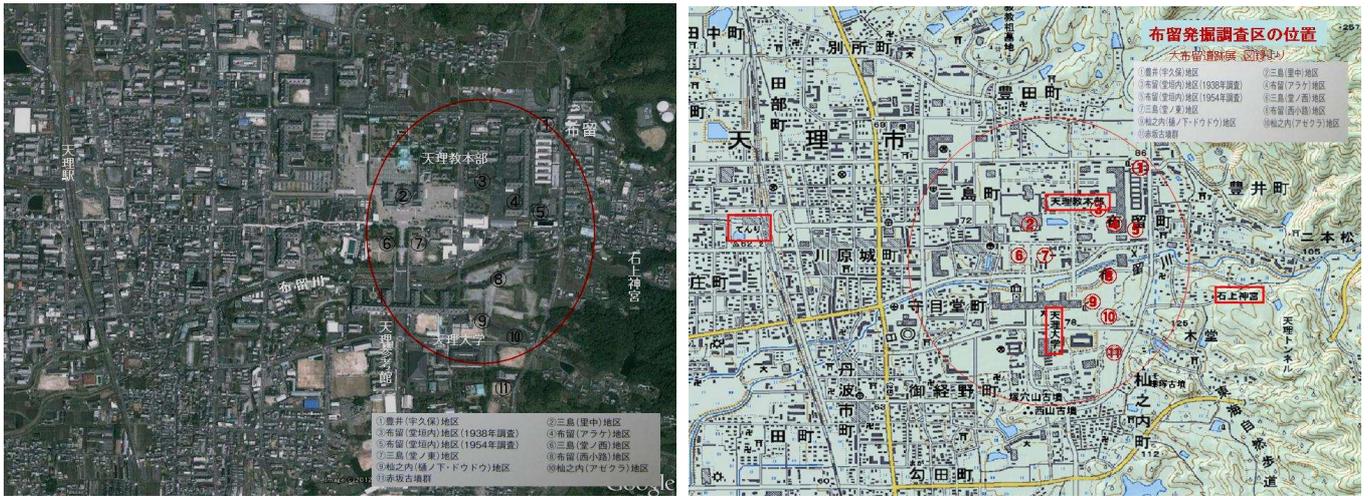
天理参考館「大布留展」図録

【図面・写真採取・参考資料】

1. 山内紀氏「ヤマトの開発史 古墳時代の布留遺跡」(2008. 7. 31.)
2. 大阪狭山池博物館 特別展「国土を拓いた金物たち」(2007)
3. 橿原考古学研究所 特別展「三国志の時代 2・3世紀の東アジア」図録(2012.)
4. 村上恭通「古代国家成立過程と鉄器生産」(2007)

<< 物部氏の根拠地 布留遺跡の性格を知る >>

「物部氏の根拠地 布留遺跡」調査区域と検出した主要遺構・遺物 まとめ 「大布留遺跡展」図録より整理



物部氏の大集落遺跡「布留遺跡」調査区域別 主要検出遺構と出土遺物 一覧

① 豊井(宇久保地区) 1984年調査	埴輪群が発見された布留(アケラ)地点から北東300m 古墳時代の掘立柱建物・井戸・土器溜まり遺構と中世の濠出土 土師器高杯(60以上)・壺・甕・須恵器壺・滑石製模造品(勾玉・管玉・剣型石製品・有孔円板・白玉)・鉄鎌などミニチュア農具
② 三島(里中地区)	布留川分流の流路が変わる氾濫原で古墳時代の井戸以外に遺構検出されず 古墳時代の流路から土師器・須恵器・木器などが大量に出土。 特に5~6世紀の木製刀剣装具類(把装具・鞘)が出土 流路からは大量の鉄滓・砥石が出土 付近に大掛かりな武器工房があったと見られる
③ 布留(堂垣内地区)【1】 1938年調査	A・B・C3地点から 祭祀にかかわると考えられる石敷遺構(住居跡を囲むと推定)検出。 この敷石に集中して土器類(土師器壺・壺高杯・小型丸底壺)出土 A地点の敷石遺構から滑石製模造品の玉類・櫛出土
④ 布留(アラケ)地区 1995年調査	1938年調査された地区から東に約60mの地点 北西から南東に幅0.4~0.7mの石列が約7m以上のび、埴輪がその北側から、破片となって出土。(復元作業で円筒埴輪10 朝顔形埴輪 15~16 固体 巴形や半円形四角形、三角形などの透孔がある特異な計状。 祭祀の場で使われたものが破棄されたと推定されている)
⑤ 布留(堂垣内地区)【2】 1954年調査	1938年調査地点より東南150m 5世紀の石敷遺構を検出 土器片に混じって剣型石製品・有孔円板・勾玉・管玉・白玉など数千点に及ぶ滑石製模造品・ガラス製小玉・碧玉製管玉が出土
⑥ 三島(堂の西地区) ⑦ 三島(堂の東地区)	5~6世紀 玉未成品・石核・剥片が出土
⑧ 布留(西小路地区) 1976~1977年調査	布留川南岸に位置する地区で 5世紀を中心とする柱穴・土坑・溝を検出 下記に示す出土品が示す通り 祭祀に関係した遺構が集中している場所とみられる 各種の須恵器や土師器のほか、製塩土器、有孔円板、管玉、臼玉、ガラス玉が出土 土坑(LN22) 内には倒立した土師器壺が置かれ、横から緑泥製の剣形石製品が出土 土坑(LN99) 内部には灰と炭化物が厚く堆積していたが、底や壁に焼けた跡なく、 ここからは各種須恵器・土師器のほか 製塩土器・緑泥石製の有孔円板・管玉 ・100点を超える白玉・ガラス玉・土玉が出土 土坑(LN100) ここからはU字型鉄製鋤先・土師器杯・高杯・ミニチュア壺などのほか 緑泥石製の有孔円板が出土
⑨ 杣之内 (樋ノ下・ドウドウ地区) ⑩ 杣之内(アゼクラ地区)	布留川南岸沿いの石神神宮から西400m 地点が杣之内(アゼクラ)地区 豪族の居館に関わると見られる石敷遺構を検出 さらに北西に100mの杣之内(樋ノ下・ドウドウ)地区でも、大型の掘立柱建物跡や大溝が 見つっている。この溝は『日本書紀』に記された「石上溝」にあたと推測されている。 この大溝からは須恵器や土師器など多数の土器とともに、鍛冶関連の遺物や滑石製模造品 の祭祀遺物、馬歯、馬骨が出土。 また、大溝に面した北西部と南東部に多くの掘立柱建物跡や竪穴建物群が見つかった。 その建物跡から鉄鉗や鉄滓、ふいご羽口破片らが出土 この付近が玉作り、ガラス・鍛冶工房だったことが分かる。 これら検出された居館にかかわる遺構や大型建物群遺構そして生産工房遺構として大溝の 開削などから、この地域が物部氏の本拠地 布留遺跡の中核部と見られる
⑪ 赤坂古墳群	布留遺跡の豪族居館や大型倉庫のある丘陵の南150m 谷を隔てた丘陵に5~7世紀にかけて の小規模な20基ほどの古墳群で、鍛冶工人が築いた群集墳 赤坂17号・18号の間の周溝から輪羽口や鉄塊・鉄滓 赤坂2号・4号・6号・9号墳から鉄滓 出土また、赤坂14号墳殺出土した韓式甕から 被葬者は百済系渡来人と推察されている。
渡来系遺物の出土	赤坂古墳群のほかにも 布留遺跡からは、5世紀の韓式系土器など 渡来人との関わりを示す 遺物が数多く出土し、数多くの渡来系集団が布留遺跡にいたと見られている。